広告

「コップの中をみよ」――成蹊教育の真価を、次の100年へ。

教師は生徒の個性を凝視し、その神性を開くことに専念すべし。

成蹊学園の創立者である中村春二は、今から百年ほど前、自身の教育哲学を「教育図解」という十二枚の図付の文書で示しています。左の「現今教育の欠陥～コップの中を見よ」はその中の一枚――。

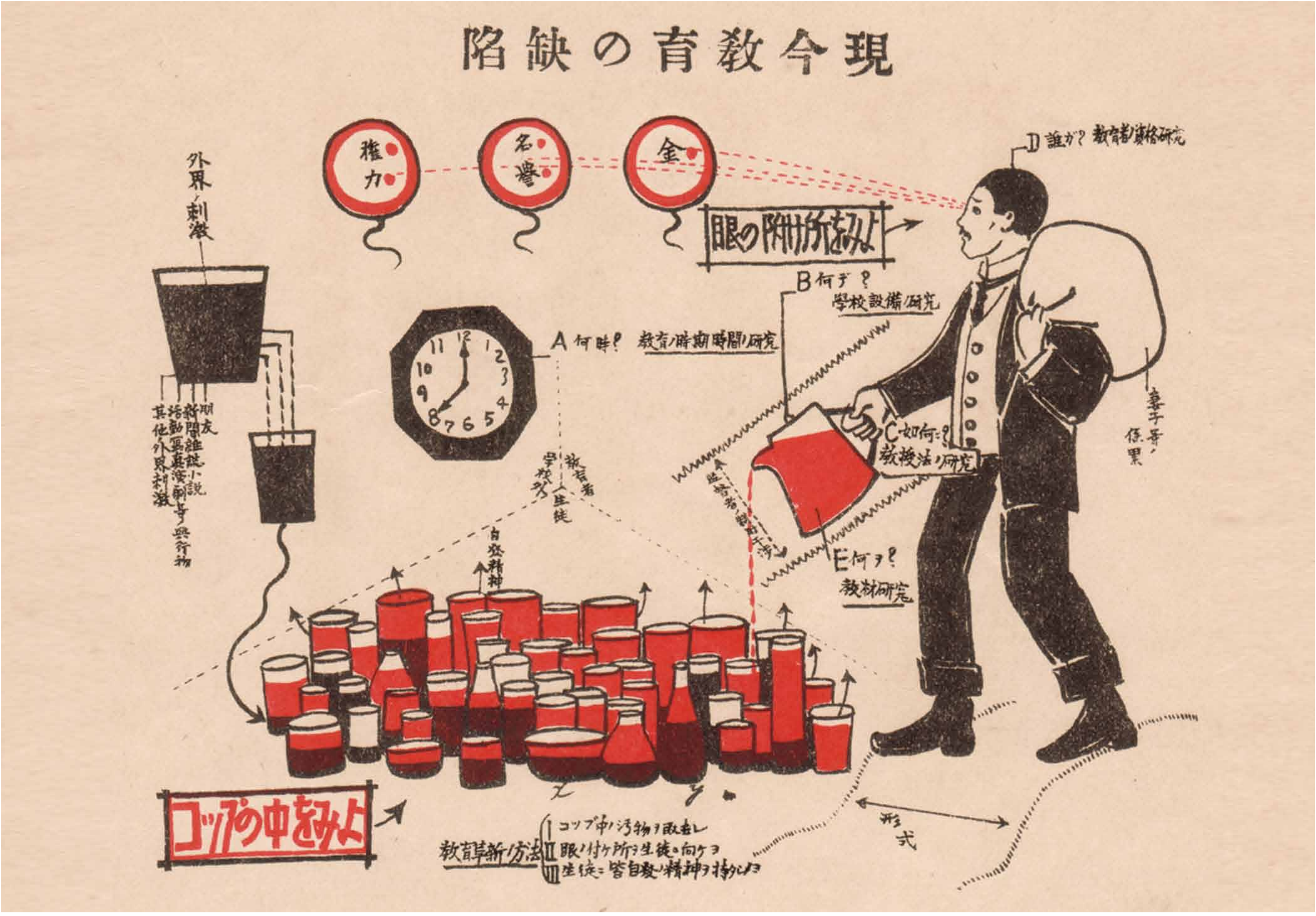
口の大きなコップ（生徒）は、水（教育）を入れることはたやすいが、こぼれやすい。口の小さなコップは、水を入れるのに時間はかかるが、こぼれにくい。大小さまざまあるコップ七、八十個や五十個に一人で水をつごうとすると、コップの大きさにより注ぎ方をかえることができない。（現代語訳）

ここでの七、八十は当時の小学校、五十は中学校の学級定員数であり、春二は早くから「少人数制による個性尊重の教育」の必要性を唱えていました。同時に、教える者の目は金や名誉や権力ではなく、常に生徒一人ひとりの個性を見つめ、その心の門を開くことに向けられるべきである、と説いています。

春二は、教育の要諦は自我の開発ではなく「真我」の開発にある、という信念を持っていました。自己中心ではなく、人のため、世の中のために尽くそうという、心の奥底にある尊い心。そうした「真我」を求める熱意と自己向上の精神を、春二はまず教師に要求していたのです。

今この時代も、教育・教育者のあるべき姿、教師と生徒の関係のあり方が問われ、揺れ動いています。第二世紀を歩み始めた成蹊学園は、師弟の心の共鳴を何よりも重視する創立以来の理念を根幹に据え、〝人を育てる〟成蹊教育をさらに発展させてまいります。「伝統に立脚し、未来を考えよ」という春二の言葉をもう一度胸に刻みながら。

創立者　中村春二


陥缺の育教今現
權力
名譽
金
外界ノ刺激
朋友
新聞雑誌小説
活動寫眞演劇寄席興行物
其他外界刺激
D 誰ガ？ 教育者ノ資格研究
眼ノ附ケ所ヲみよ
B 何デ？ 学校設備ノ研究
A 何時？ 教育ノ時期時間ノ研究
C 如何ニ 教授法ノ研究
E 何ヲ？ 教材研究
学校
教育者
生徒
自發精神
妻子等ノ係累
形式
コップの中をみよ
教育革新ノ方法
I コップ中ノ汚物ヲ取去レ
II 眼ノ付ケ所ヲ生徒ニ向ケヨ
III 生徒ニ皆自發ノ精神ヲ持タシメヨ

産学トップ教育対談

成蹊教育の「真価」と「進化」

100年の伝統を礎に、第二世紀への新たな挑戦

学校法人成蹊学園
学園長
橋本 竹夫氏

1945年東京生まれ。成蹊中学・高等学校、成蹊大学工学部を経て同大学院工学研究科博士課程単位取得退学（工学博士）。日本自動車研究所研究員を経て79年から成蹊大学工学部教員。2013年4月から現職。

×

大正製薬ホールディングス株式会社
代表取締役社長
上原　明氏

1941年東京生まれ。成蹊小学校、成蹊中学・高等学校を経て慶應義塾大学卒業。77年大正製薬入社。専務、副社長を歴任し、82年社長に就任。2011年大正製薬ホールディングス会長兼社長、13年6月から現職。成蹊学園理事。

教師の情熱こそ、変わってはならない成蹊の原点

橋本　大正製薬も、私ども成蹊学園も、同じように100周年を迎えています。今日は卒業生である上原さんに、成蹊教育の価値や、これからの教育のあり方、求める人材などについてお話を伺いたいと思っています。

上原　今の自分の考え方や判断基準というのは、成蹊学園で学んだ影響が非常に大きいですね。小学校、中学校、高校で授かったものが、意識してもしなくても身に染み込んでいる感じがしますから、成蹊に対する感謝の気持ちが大きいです。

橋本　思い出に残っている先生はいらっしゃいますか。

上原　小学校の時にお世話になった清水晴男先生は、土道に生える雑草のように踏まれても踏まれても何度でも立ちあがること、人に寛容であること、人間や仕事に貴賤はないことを、常々教えてくださいました。それから、物事を観察する目ですね。君、よく樹を見なさい、枝が一つ一つ違うだろう。空を見なさい、雲も毎日毎日違うだろう。細かく見れば、いろいろなことが発見できるよと。本館屋上から富士山を望みながら、どっしりした人間になろうと仰っていたことも憶えています。大きな心で、大きな視野で、自分でものを見て考えろということを教えていただき、非常にプラスになっています。

橋本　自然と触れ合う学習を大切にしている様子が伺えますね。それは今でも変わりません。

上原　それから高校の松田満夫先生も忘れられません。「大学受験でも、社会へ出てからのポスト争いでも、他人を蹴落とす生き方は納得できない」という悩みをぶつけたことがあったんです。成蹊の精神に反するのではないかと。先生はしばらく考えられて、こう話されました。「君にとって大学に入るとか、出世することが最大の目的なのか。それはあくまでも手段であって、大事なのはどんな志を持っているかじゃないか。社会に貢献するための志があるなら、君は敢然と立ち向かうべきだ」。それを聞いてすっきりしましたね。我欲ではない自分の志。私はそれから、世の中や次の世代のために行動しよう、そうすることで私を後押ししてくれた方々に恩返ししよう、そんな気持ちを忘れないようにしています。

橋本　私も情熱ある先生に恵まれましたが、特に大学院で指導していただいた先生が非常に熱血漢で。私が分からないことがあるとすごく親身に指導してくださり、それでも分からない時は持ち帰られて、次の日お目にかかると、君、昨日僕は寝ないで考えちゃったよ、と言うような方でした。逆に私自身が怠けていると烈火のごとく叱る。そういう中で自分の悪いところが意識でき、心から叱っていただけるありがたさを痛感いたしました。後に私自身が工学部（現在の理工学部）の教師になりましたけれども、学生を指導するときのあり方など、恩師の影響を強く受けましたね。やはり学生に本当に真剣に向き合おうとすると、そういい顔ばかりできないんです。

上原　こっちが真剣に出なければ、向こうは絶対に真剣に受けとめない。会社のトップに立って、また、親になって感じることは、社員も子供も上司や親の言う事を聞くんじゃなくて、後ろ姿を見て真似ているんです。生徒も同じでしょう。だから、後ろ姿を意識すればするほど手が抜けないですよ。逆に言えば、それが自分をより高め、前進させることになる。創立者の中村春二先生が「教えるということは、教壇の上から知識を詰め込むことではない。自ら向上しようとする教師の魂が、生徒の伸びようとする魂と響き合い目覚めさせることだ」ということを言っておられますけれども、まさにそう思いますね。

橋本　教師と生徒の心が共鳴することで、生徒の心が開かれていく。こういう師弟関係が成蹊教育の原点にあるかと思います。企業のトップとしての立場から、現代社会ではどんな人材が求められているとお考えですか。

上原　今、生活者の意識やマーケットの様相が、世界規模で急速に変わっていますよね。日本だと少子高齢化も考えなくてはならない。そんな変化の時代に最も重要なのは、問題意識、危機意識を持つ人。そして、問題解決のためにいろんな可能性を探して行動できる人。さらに言えば、危機も好機と考える前向き発想の人ですね。

橋本　成蹊では中期重点目標というものを立てていますが、一番重要な教育の取り組みが、まさに課題発見と課題解決の能力なんです。

上原　生徒が自発的に関心を持つように刺激を与えるには、まず先生方自身が問題意識を持っていなければならない。何の問題意識もなくて教科書の知識の切り売りだけでは、それこそ問題です。

橋本　同感です。そもそも教師というのは、損得勘定とは相当距離がある職業だと私は思っています。そういう中で教育に情熱を持ち続け、世の中にどう自分が役に立てるのかを追求する。そんな心構えが、中村先生が仰っていた「真我」と関係するような気がします。

上原　「真我」とは、人の心の奥底にある尊い心、自分を捨てて世の中のお役に立ちたいという精神だと理解しています。私が私がというような、自分中心で真理を見る目を曇らす「自我」とはまったく異なる。

教える者は今の世の中が求めていることをよく理解し、自分が担当している教科を通して生徒の心を揺り動かし、「真我」を目覚めさせる存在であってほしい。先ほどの「志を持て」ではないですけれど、心の奥底にある尊い心に目覚めれば、その生徒は自発的に努力するようになると思いますね。

橋本　そうなってくると、やはり教師と生徒の距離が重要。多くの生徒がいると、それぞれの心、それぞれの個性を見据えた教え方は到底できない。画一的な教育からもっと自由な教育のあり方を追求し、創立当初から少人数教育を重視して実践されたのが中村先生でした。

上原　自発的精神を養うこと、個性を発見し伸長させること。中村先生のこうした創立の精神こそが、成蹊教育の真価だと私は思います。

仮校舎で行われた授業の様子 1912（明治45）年

変わる成蹊。すべては、新時代に学ぶ者のために

成蹊大学情報図書館

橋本　100年を超える企業の歴史の中で、改革を迫られたことも多々おありだったと思います。伝統を堅持することと改革すること、これは相容れない場合もあり得ると思うのですが…。

上原　現状がうまく行っている、売上が上がっている時は、改革へのチャレンジはなかなかしにくい。それでも常に変化に対応しなければいけないんです。「着眼大局、着手小局」という言葉がありますが、まずは時代の変化をどう読むか。周りが変化しているのにも拘わらず従来のやり方に安住していては、後手後手になり、置き去りにされてしまいます。

橋本　英断を持って改革を実行するためのリーダーシップとはどのようなものとお考えですか。

上原　まず、部分最適より全体最適を考えて判断すること。変革することとは苦痛ですよ。だから、組織の中には変わることを嫌う人もいるかもしれません。でも長い目で見て、企業や学校全体を守る、進展させる改革を進めるべきです。そして、今のことと関連しますが、リーダーは長期的な視点と短期的な視点の両方を持つ必要があります。長期的にも短期的にも良い、あるいは悪いなら、判断は明々白々です。長期的には良いが短期的には成果が期待できない場合、これを先延ばしにするのは駄目です。最も悪いのは、長期的に見るとやってはいけないことなのに、短期的に業績が上がるから飛びつくこと。企業でも教育機関でも同じだと思います。

橋本　よく分かります。私は、改革が実を結ぶためには競争原理が欠かせない気がしています。教育の世界にも競争原理を持ち込み、きちんと評価する仕組みを作る。それが教育の質を保証していくためには絶対に必要だと思っています。

それともうひとつ。大学ならその方向性を決めるのはやはり学長ということになりますが、学長の決め方、リーダーの選び方が、教学改革には非常に重要だと思っています。それが、まさに上原さんが先ほど仰った、全体最適を考えてリーダーシップを発揮できる環境につながる。

上原　学長に限らずトップに求められるのは、これまでにどんな経験を積んできたかということ、それと問題意識ですね。問題意識のないところに改革なしです。リーダーの選考に当たっては、その人の問題意識を含めて、何回も何回も話し合う。つまり、選ぶほうにも責任がある。選ぶ時だけでなく、選んだ後にもチェックしていく責任があると思う。そうなってくると、内側だけでなく外からの視点、またチェック機能となる第三者が入らなければ駄目だと思う。

橋本　外にいろいろな知恵を求めるということは、本当に必要だと思います。中だけで何かやろうと思っても、どうしても限界がある。成蹊学園では、国際社会で活躍されている卒業生や文科省で要職にあった方をはじめとするアドバイザリーボードを設け、その助言や提言を学園の運営に活かしています。

上原　問題意識という話で言えば、今いろいろな大学・学校でグローバル化に取り組んでいる。しかし、生徒のグローバル化の前に、先生方自身がグローバル化する必要があるんじゃないかと。

橋本　グローバルに活躍できる人材を育てるために、単に英語で教えるということだけではなく、教員自身が国際的なネットワークや活動の場を持つべきでしょう。真のグローバリゼーションとは何かを問いながら、先ほどのお話ではありませんが、教師自らが伸びていく、変わっていく精神を持たないといけない。

上原　教師自ら変わるのも重要だし、新しい学部や学科の設置を含め、時代の変化にマッチした科目、内容に変えていくのも重要でしょう。

橋本　成蹊学園の強みのひとつでもあるのですが、小・中高・大が自然豊かな武蔵野のワンキャンパスにある。この恵まれた環境の中で一貫教育を推進していくとともに、地域社会との連携も非常に大切だと思っています。武蔵野地域を中心とした諸大学や行政、街とのつながりをもっと強めていく。それは成蹊学園のためというより、地域にどうやって資するかという観点から重要な気がします。

上原　例えば生涯学習の場を整えるというのも大きな意義があると思いますね。学ぶだけでなく、人とふれあう場としても。高齢化、長寿化の現代では、定年後の生き方、充実したセカンドライフというものを産学共に模索しなければならない。

橋本　教育の世界も昔とではずいぶん様相が変わりました。インターネットによるオンライン講義というものもあって、そうなると学校という場はどういう場として成り立つのかと。そういった中で考えてみると、中村先生がお考えになった教師と生徒の関係――心を共鳴させて「真我」を目覚めさせるという教育のあり方が、今の時代にもう一度見直される必要があるんじゃないかという気がしています。

上原　改革の大前提は、創業の精神、建学の精神です。それこそ会社、学校の哲学、寄って立つ拠り所です。教職員に対して成蹊教育を徹底させることは当然ながら非常に重要なことと思いますね。そこに立脚して、現代風に、そして未来を見据えて、自らを進化させていく。

橋本　日本の大学は国際化の遅れなどが指摘され、政府の教育再生実行会議の提言を基に国レベルでの改革の動きも活発化しています。私は、私学としての伝統を踏まえた上で、長期的な視野に立ち、変えるべきところは大胆に変革していくことが必要と思っています。本日は貴重なお話をありがとうございました。

小学校は1学級28人制（英語の授業）

3月23日は、成蹊学園建学の日。

1912年、創立者中村春二が、岩崎小弥太・今村繁三 両氏の賛助を得て、成蹊学園の前身である成蹊実務学校を設立。しかし、開校式を10日後に控えた3月23日、近隣からの貰い火で校舎が全焼するという不運に見舞われました。中村春二は「教育は建物ではなく精神である」と、仮校舎を急造し予定通り開校。成蹊学園では、中村春二が教育に対する不退転の決意に至ったこの日を「建学の日」と定め、建学の理念を永く継承していくこととしました。

「教養ある豊かな人間性」で、時代をひらく　SEIKEI　学校法人 成蹊学園

成蹊小学校 | 成蹊中学校 | 成蹊高等学校 | 成蹊大学

http://www.seikei.ac.jp/　〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1